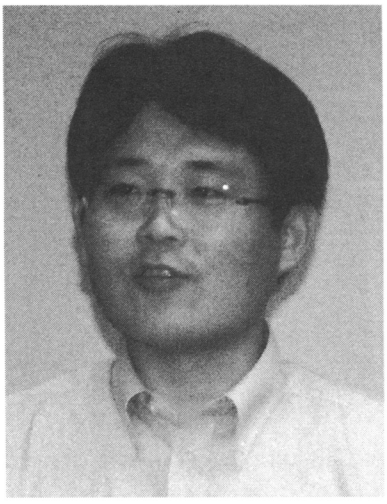
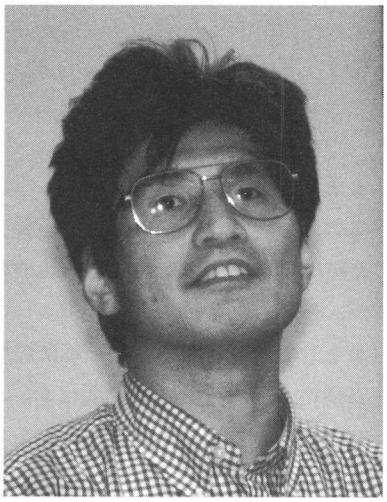
総 合 討 論

野間：滋賀県立大学の野間です。私がこの進行役を手伝うのは，多分12年少し前に関西学研都市を作ったときに，オオタカが住んでいる里山の調査を行っていたためだろうと思います。それから最近は，滋賀県に移ってからは，滋賀県立大学の学生と一緒に炭を焼いたり，マキで発電をしようということをやっているからだろうと思っているのです。今日の盛りだくさんの内容の三つの講演を聞かせていただいて，特にこの討論のストーリー等は考えていないのですが，私なりにまとめておきますと，まずはじめに大住さんからは，里山林の管理技術はOKである。いろいろ進まないのは社会の側の問題であるという問題提起でした。次に岡田さんからは，今も生産に直結している炭の最高級品である備長炭の生産のために，今も関係が保たれている和歌山県の里山管理の例を具体的にお話をしていただいた。そして最後に石井さんからは，チョウから見て，里山林の現状と管理の方法について，保全のターゲットを非常にはっきりさせた上で調査をして，こうしたらこうなった，ということを具体的にお話いただきました。里山林の管理には，生物の多様性の保護が必要ですので，まず最初は生物多様性の問題から始めたいと思いますが，その生息環境の維持あるいは復元，そして資源として利用すること，これは地球環境問題の化石燃料からの転換体の問題にも，ここ数年急速に関係づけられて話されてきました。それから地域の活性化にも三つの大きな問題があると思います。どれにも問題があるということが，今回のお話の中で明らかになってきたと思います。しかし一方では，大住さんの話にもありましたように，社会の側にもそれを求める気運ということがあるのではないかと思います。すでに議論の中で出てきましたように，現代的な燃料として使う，炭にするということは試みられているわけですが，そういう状況の中で，私たちにここで提案していく，あるいは方向性を考えていくことで，出来ることはどういうことでしょうか，ということを考えながら，といいながらも自由にどこからでも議論を始めていただきたいと思います。どなたでもどうぞ。



後藤：こういう意見を言うといやがられるかもしれませんが，このシンポジウムの案内に「現時点において，高度経済状況下において」という問題提起がされているわけです。この話は現代の経済状況を治せば何とでもなる話であって，そっちを抜きにして里山の話をするほうが問題であると僕は思います。といいますのは，そもそも里山生態系というのは，持続可能な生態系であるのに対し，今の経済的状況からすると，外国から物がどんどん入ってきて，ほんとうだったらそういう物がうまく配分されて豊かになれるはずなのに，物が都



市だけに入って行くという社会的条件がある。そこを変えないと何も変わらない。そこを変えたら，里山にもちゃんとお金も入ってくるし，人も雇えて里山も維持できる。どういうふうに考えたらいいかというと，今，石油文明になった社会が問題であって，やはりそれを減らすということを考えたら答えは簡単であって，資源の非永続的な使用の仕方，つまり化石燃料等に対して，二酸化炭素の問題も含めて，社会的不経済というか，外部不経済と考えて，内部経済化する。その方法としては使った石油の代わりに，炭などを埋め戻せばいい。そうすれば，ちゃんとお金にもなっていく。やはり問題はむしろ使われすぎで，日本の森林の二酸化炭素吸収量は，3.7％というのが本当かどうかはわかりませんが，うまく使ったら倍以上にはなるだろう。炭を使うことで需要を内部化することをやっていくほうが自然保護にはなるし，逆にもし石油の輸入を止めたら，もともと社会的な制約みたいなものがなくなってきているので，過剰使用されるでしょう。これが第一の問題であって，次に現実に人がいなくなってしまうというのはどうにもならないので，緊急的に伝統芸能等と同じように考えて，税金を使ってでも育てるとか，里山管理技術などを保全すべきだと思います。文化財のほうはどうしているんでしょうかね。そういうふうにして，緊急の課題と最終的な課題とを考えるべきなのではないかと思います。

野間：はい有難うございました。発言の前にお名前をお願いします。するどいご指摘だったのですが，それについていかがでしょうか。

石井：いまの話ですが，なかなか難しいですね。一つは外部経済的なことを内部経済的にとっていうところが超えられないんですよ。しかし，さっき大住さんの話で質問させていただいたんですが，やはり正しい使い方をすれば，薪炭類はいつまでも役立つんじゃないかと思います。例えば，燃料としての見直しも一つの社会的な流れで，いわゆるバイオマス発電もそのひとつですね。木材をそのまま燃やしてバーベキューなどに使うのもよいですが，そのエネルギーで発電したり，燃料電池を作ったりして，いろいろな物を動かす時代がもう来ています。そのときは何を燃やしてもいいわけです。間伐材をペレットにしている所もあるようですね。そこに里山が復活する芽があると私は見ています。もうひとつは，生物多様性国家戦略の見直しです。その中では，今回はかなり里地・里山の生物多様性保全機能の重要性を認めています。また，生物多様性保全を重視した自然公園法

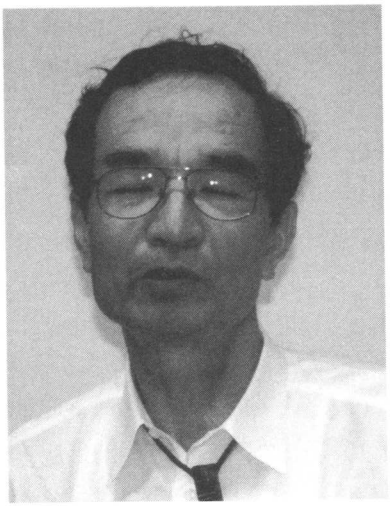


の改正も盛り込まれています。その中に，グリーンワーカー制度の拡大があり，今までは原生林を囲いこむ形で天然記念物型の自然保護をやっていたんですが，それに加えて里地・里山にも人手を入れて，国費をかけてでも生物多様性の保全をしようという計画をしているようです。国家の戦略では，農水省も中山間地域の農業が維持してきた，二次的自然の重要性に目を向けています。食物自給率があまりにも低すぎて，輸入食料で国土がすでに富栄養化してしまっている日本は，農業の環境保全機能についてはっきり言い続ける必要がありますね。

野間：環境省のことを考えますと，燃料利用のような具体的問題であれ，また他の一般的問題であれ，問題を経済的な視点で捉え，かつ解決策を経済的に考えようとする努力は希薄であったと思います。一方林野庁側からは，生産というところから問題が検討され始めます。私たちからみてどちらも同じところだと思います。生物多様性にとっては，大事なところを考え出していると思うのですが，まだ多分具体的にこういうふうにしようと提案があると，例えば補助金をつけるとか，補助金の是非は別の問題が出てくるのですけれども，そういうふうに政策レベルではそうなってきているのではないかと思います。

石井：国家戦略の改訂版が出版されます。将来おこなわれる見直しまでの国策として決められているわけで，その中に盛り込まれている里山の保全の施策に期待したいという思いです。

村上：今の内部経済と外部経済の問題については，僕らが管理できない，そこが問題だと思います。それで，要するに里山の問題についても，いわゆる経済性を考えていくとよくわかると思いますが，結局その経済性をどうするかということが問われていているのです。国家戦略の中でも里山は取り扱われていますが，ここでもやはり里山の経済性



については，触れていないんですね。野間さんが言われるように，電気をつくってそれを売るという話はありますが，今のところはそれで経済的にやっていくのは難しいですよね。里山の木を使ってペレットを作り，発電するアイデアがあるので，これを野間さんに紹介していただきたいのですが，それはひとつの里山を管理して，伐採したときに，いかにお金にするかということを考える必要があります。でも現状では，当然地域経済を賄えないので，日本全体を考えるとそれも無理です。そういうことができるようなシステムを作ることが必要です。それに対して，どれくらいの見通しがあるのかということが気になるところです。それから，大原野森林公園というところで定期的に木を伐採して，里山の管理をしているのですが，そういいながら伐採したものを里山の外に出すのには大変なお金がかかるので外へ出せない。そのお金が出ないということです。三草山の例の場合でも，伐採するためにどなたかが，お金を出してくれているわけですよね。だから例えば大原野の場合には，京都市が基金を作って，それを利用して里山の管理をするということをしているわけですが，それだけではやっていくことができない。そういうことで，税金で里山を管理するということがやっ

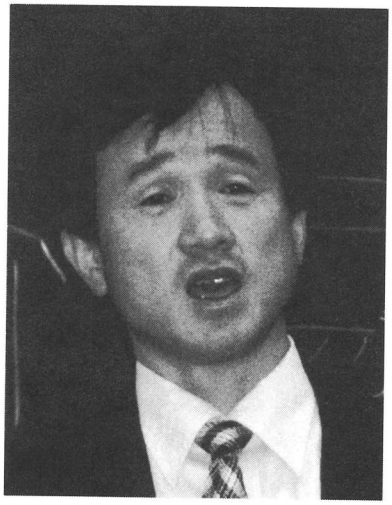
ていけるかどうか，そういうところに来ていると思うのです。そういう社会的な認識がまったくできていないのが現状です。

石井：大阪みどりのトラスト協会の初代の職員だった方が能勢の古老だったので，その人から聞いたのですが，昔は6月のある日を解禁日として，里山の中に一斉に村人が入って下刈りをして，それを持ち出して利用していたそうです。要するに下草は資源だったわけですね。お金がかかるとか，かからないではなくて，そうしなければ農業が成り立たなかった。現在，三草山では，能勢の森林組合にお願いして下草を刈ってもらっていますが，持ち出すまではしないわけです。刈ったものが山の中に残るわけですから，昔と違って里山が富栄養化しているような気がします。たしかに見かけ上は遷移がとまっていますが，土壌の状態からいったら，もう進行し始めているんじゃないかと思います。刈った草にも価値を持たせて，持ち出さないといけないのでしょう。

村上：大原野では土壌に，ものすごい蓄積があるんです。その土壌が増えつつあるんです。今のままでは話にならない。だから，林の維持をしようとしても，実は土壌がどんどん変わっていっています。

野間：大原野森林公園という名前が出ているのですが，これは皆さんご存知のポンポン山ゴルフ場問題の後，京都市が買い上げて公園にしたところでして，これは京都市が伐採費用をつけ，管理が始まりました。それはよかったんですが，搬出までの費用は見ていなかったので，これが問題でこれをどうしようかということで，今やっとすこしづつ動き出し，ボランティアを何とかといっているのですが，これもなかなか大変という問題があります。実は今週の土曜日に，京都市が作った都エコロジーセンターというところで，それを考える会があります。それとペレットということが出ているのですが，現在，日本に4箇所の工場があります。実は石油ショック後に燃料の減産ということで，木質ペレットの工場を十数か所に作ったのですが，原油価格が戻るとほとんどつぶれてしまい，三箇所だけ残って細々と営業をしていました。輸送費のかからない工場の近くの地域では，現状では何の根拠もないのですが，カロリーあたりの値段が灯油より少し安く，重要度が高いということで使われているところもあります。今年7月から高槻市森林組合，現在合併して大阪府森林組合になりましたが，氏原さんという理事の方が，これからの林業は燃料生産でも，生きていくしかないといっておられまして，それを作ってそこでは間伐材と宅地造成などで出た里山林の木材を受け入れて，ペレットにするという計画です。今日は植林地の問題はあまり深入りしませんが，実際には燃料利用は林地廃材，それから製材廃材が最初に使われるのだろうと考えられます。現状はそうですが，その先に里山林の燃料利用というのが，果たしてうまくある形ができるんだろうかということが問題だと思うのです。

岡田：簡単な話で申し訳ないのですが，私は現在，家で薪ストーブを使っています。山から木を切ってきて，乾かして薪にして11月から3月ごろま



での５ヶ月間ほど使います。感じで言えば 20 本も切っていません。年間に 10 数本ですね。ということで家では３年前から灯油は使っていません。夕方つけて夜寝る前に薪を足したら朝まで暖かく，非常にいいですね。そんなふうに考えたら，１ヘクタールの里山があれば，そこでまかなえる薪は数十軒，いや下手したら 100 軒ぐらいになるんじゃないかなと思います。そのかわり薪は高いですから買ってきたらだめですよ。自分が働いて作ればの話です。自分が働けばそのくらいのことはできると思います。

相良：先ほどの刈ったササを持ち出さないということ，それから落ち葉がたまるとよくないということは，よくわからないのですが，それはよくないことなのですか。

村上：先ほどの話は，土壌に栄養物が蓄積すると，林の遷移が進んでしまう。だからたまった落ち葉を持ち出すことが必要ということです。もともとの落ち葉などの蓄積と，伐採したものが蓄積するということですから，ものすごい蓄積量になります。それを持ち出すことを考えないといけないと思うんです。昔の里山ではそれをエネルギーとして持ち出して，使っていたわけですから，いまはそれがたまってしまっている。それが問題だということです。

相良：内部に蓄積したら，なぜいけないんですか。私はリターが厚く積もった方が，森林浄化機能，保水機能，耐水機能などの色々な機能を高度に発揮させるのに，都合が良いと考えています。

村上：そういう意味ですか。その場所の植生変化がかわりますね。昔のような，コナラとかミズナラとか，そういう林は土壌が富栄養化していないんです。今は手入れしていないので，自然に植生が変化するようになってしまっています。植生管理をしないので，林が維持できないような土壌になってしまっています。

相良：昔の里山がいい自然であるという考え方が，私には理解できないんですが。

石井：それについてはいい自然じゃなかったという説のほうが有力だと思います。京都精華大学の小椋先生によると，京都盆地を囲む山々は，昔はアカマツがチョロチョロのハゲ山だったということです。愛知万博の会場となる海上の森も同じだったようですね。おそらく都市の近くにある里山というのは，搾取されて同じように，貧栄養なものだったのではないでしょうか。どうして里山の生物相が維持されてきたのかというと，私の考えではそのむこうにある奥山のおかげだったと思います。先ほど，水源林の入った絵を示しましたが，たぶん里山だけだったら，多くの生物を維持できなかったと思います。そのむこうに，原生的な自然としての奥山があり，そこから染み出てくる自然要素が重要だったと思います。ところがその奥山自体が開発されるし，里山は放置されるし，今はダブルで変わってきています。

相良：遷移が進んだらいけないというのはどういうことですか。

石井：何にとって遷移が悪いということが問題になると思います。つまり，問題を考える時には，何にあたる個別の問題を具体的に定めることが必要です。

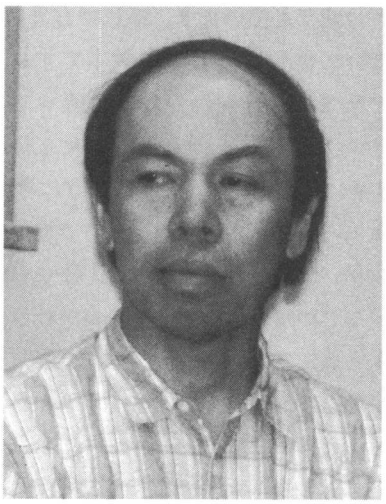
野間：たぶんそれはバランス問題でもあって，遷移が進んでまたたくさん棲めるようになる生物もあるわけですが，日本中がそちらに偏りすぎていて，貧栄養のところにいる特に小さい植物とか，マツタケなんかもそうだと思いますが，それが住むところがまったくなくなってしまっていることについて，問題視しているということではないかと思います。ですから，富栄養化の方では，ほっておいても日本中にいっぱいあり，進行中で，貧栄養の方は 40 年ぐらい前から，新たに生産される場所がなくなっている。そういうことが日本に

棲んでいる生物の種という面から見ると，まったくいなくなってしまうのは問題であるという理解で，そういう議論が今までされてきたのではないかと思っています。

村上：絶滅の恐れのある種の 50 %ぐらいは里山にあります。それが何でかというと，昔は里山が管理されていたから，里山に生息する多くの種が普通に見られたわけですが，その管理がなくなって，遷移が進むとそういう生物は駄目になる。したがって生物の多様性の問題からすれば，里山の生物はやはり保護しなくてはならないということです。それは過去と現在の現状から考えると保護するためには，管理をすることが必要ということであって，すべての森を管理するかというと，そうではないのです。

相良：私は，他の絶滅危惧種のことは知りませんが，マツタケに関しては，縄文時代のような自然に戻っても，マツタケは絶滅しないと思っています。マツタケが生える山が良い自然だとは思いません。マツタケの生える山が欲しいというのは，自然保護の問題ではなく，適当な言い方ではないかも知れませんが，社会福祉の問題のように感じます。それでは，極相林はどこにあればよいとお考えなんでしょうか。

大住：私もすべてバランスの問題だろうと思います。極相林と里山それぞれのバランスがあっていいと思います。里山は資源として利用するために，多様性があろうとなかろうと，昔から管理してきたわけです。しかし今，なぜ生物多様性を考えて管理しなければならないかというと，現実に失われつつある，消えつつある生物がいる。それはなくなってしまってもかまわないかもしれないけれど，私たちにはかまわないかどうか，今の時点ではわからない。わからないのであれば，なるべくその変化は小さくしておいたほうがいいだろうということです。今，里山の生物多様性のようなこ



とについては，昔のように維持するのは無理なんですけれども，たとえ一部の人でも，地元の人などの動きで，復活することができるのであれば，あるいは一部でも残しておくことは，意味のあることと思います。それが本当に価値のあることかどうかは，次世代の人たちが，また考えていくことだろうと思います。あと原生林はどこにあればいいかということですが，原生林という厳密な存在を考えて，それをどこに配置するかと考えるよりも，原生林といわれる林にも，多少なりとも人の手が入っているのであって，その人手の加わり方を，どう地域によって調整するかと考えた方がいいと思っています。

相良：とすると，全部が里山のように思えますが。なお，私は極相林や原生林至上主義者ではありません。植えるべき所にスギやヒノキを植えるのは，水田にイネを植えるのと同じだという考えです。

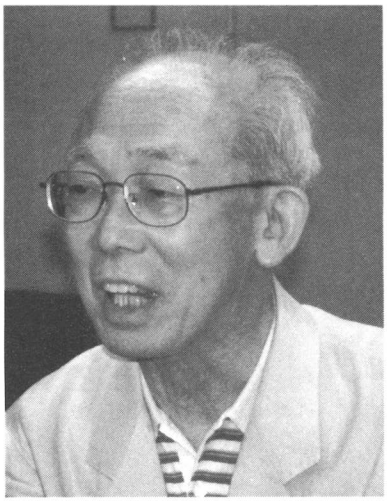
北元：私にとって里山というのは高槻市北部郊外のスギ人工林であり，17 年間ですが，ジャラ畑谷でスギの人工林と，そこに生息するヒグラシの動態調査をしてきました。気になるのは野間先生が，植林などの問題はメインではないとちらっとおっしゃいましたが，私にとって里山というところは，大住さんの資料に，里山の二次林とその技

術というのがありますが，スギの人工林であれ，ヒノキの人工林であれ，二次林です。おおいに対象になっていいはずですね。対象にならないのはなぜか，逆にお聞きしたい。面積的にも里山の大半は人工一斉林です。

野間：それは使わないというのではなく，もちろんつながっています。ですが，植林地には植林地の問題があります。むしろこれは簡単だと思うのですが，しかしまた林業の側の人たちが，対策を考えられたらうまくいくと思います。もちろん問題はあると思いますが，むしろそのために設備というか，物も作られています。里山には，それとはまた違う困難さというのがあって，そのためにいま，ここで議論をしているのであって，それがそちらの生物多様性ということであり，またそれはとりあえず，つい最近までは対策を考えようということを担当する役所というものもなかったので，とりあえず今日はそちらの側に重点を置こうということです。

北元：わかりました。

高橋：保全協会の高橋です。私たちも里山に関するシンポジウムを何回か開いてきていることもあって，関心を持って聞いていました。要するに里山を守るために税金を使ってもいいけれども，税金を使ってでも生物多様性の高い里山を守っていくことに，直接的な恩恵を受けるわけではありませんので，一般の人々は，納得しないだろうと思うんです。それならどうするかというと，里山が庶民のレクリエーションのために解放されて，それで庶民に使われた税金が，還元されることが必要だろうと思うんです。あとの大部分の里山の管理からは，撤退すればいいと思います。というのは，日本の国土の７割が森林であるというのは，先進国では珍しいことです。例えば，イギリスは10％です。そのうち半分の５％は昔からの里山ですね。そういうところを誰が管理しているかというと，いわゆるボランティア活動で管理しているわけです。数万人ものボランティアが一人一人現場に行って，管理をしていますので，日本とは桁違いの動員力です。特定の地域の，特定の森を対象にしています。そういうことから言いますと，日本の場合もやはり，特定の地域で国立公園とか自然公園とかに，精力的に税金をつぎ込んで，保全管理を推進することが必要でしょう。イギリスの場合，ボランティアでやっているところはどんなところかというと，ナショナルトラストの用地とか，カントリーパーク，いわゆる田園公園とか，自然保護地とかそういうところに限られているんですね。みんなそういうところに出かけていく。そういうことを考えますと，われわれの場合も，どういう地域を保全するのか，どの区域を自然の遷移に委ね，どの区域を管理するべきかという，地域的な里山保全計画というものを作る必要があるんじゃないか，人々が喜んで入っていけるような場所として，利用することを条件として，積極的に保全管理を推進する必要があるんじゃないかと私は思うんです。70％もあるような森林を，同じように管理しようなんて思っても，とても答えは出てこないと思います。私が日頃考えてきたことをお話しました。



石井：生物多様性保全の観点から言うと，個々の種を守るには，周りの里山が消えてしまったら，そこの個体群はどうなるのか。だからそのあたりのことを考え直していただいて，生物多様性保全も考慮に入れた，連続した里山保全が必要ではないかと思うんです。

野間：どうぞ

後藤：申し訳ないですが，むしろ石井先生お聞きしたいと思います。私はレクリエーションに頼る里山管理という考えはうまくいかないから，むしろ人類全体の価値の中でどう位置づけていくかということを考えないといけないと思います。そうすると永続的な社会を考えると，むしろ里山が昔のように使えるようにすることを考えるべきであって，使えない経済的理由があるのなら，その経済的理由のほうを制限すればいいと思います。本来持ち出してはいけない物を物質循環の中から持ち出しているわけですから。土壌にたまらないと物質循環がうまくいかないし，水もたまらないと水の蒸発もうまくいかないはずで，それを経済的理由で，いわばどんどん借金をして，どんどん物が日本やアメリカに持ってこられるということが問題で，逆にそこを大事にすれば，日本の森林は自然経済的に本来は有利なんであって，日本の森林は持ち出せるわけですから，本来の日本の自然が使えるようにすれば，日本の自然は豊かであり，日本の自然は持ち出せて，本当は資源として有利なはずなんですよ。そこを変えれば，今まで問題になっていたことが解決できるんだと思います。問題は無制限に使っちゃったらどうにもならないんですよって言うことです。ちゃんと経済的な手段をとれば，回るようになるというのが，私の意見です。石井先生から先ほど，燃料電池の話が出ましたがそれは少し違うと思います。使用時においては燃料電池は効率がいいんですけれども，森林管理に関しては，Cと水しかとれないわけですから，Hと遊離しなければならず経済的にも難しいと思います。

石井：薪の燃焼エネルギーを使ってというのはーーー。

後藤：だからむしろ埋めちゃったほうがいい。そのかわりに天然ガスを使って，化学的なバランスをあわせておいたほうがいい。物資収支的にはNとCを合わせて循環させるほうがいいとは思いますけれども。今の現状を考えれば，多少天然ガスを使っても，状況を軽くしたほうがいいと私は思います。とりあえずCのバランスはあうはずですから。

野間：いろいろな意見があって，それぞれに理由があってつめようという里山管理で進めるために，わざわざ立場があるからだと思うのですが，やはりひとつの理由だけではうまくいかないので，今があるんではないかと思います。そこでKONCの立場からどういう提案ができるかというところが議論の中心だと思うのですが，少し予定の時間も過ぎているんですが，うしろの方どうぞ。

岸：議論の中心になっている生態系とは何なのか，生物多様性とは何なのか。また，それにはどういう可能性があるのかということを説明していただけませんか。

石井：教科書どおりに言えば，生物多様性とか，生態系の意味は，人間側からのわがままな言い方をすれば，ひとつにはただで生態系サービスを受けられるということです。例えば酸素の供給ひとつをとってもそうだし，きれいな水もそうですね。そういう生態系サービスは，自然生態系のたまものであって，海や森ともいろいろあるけれど，そういう生態系の部品は個々の生物です。それをただで維持しようと思うなら，多様性がひとつだということではないでしょうか。2つ目として，自然は衣食住などいろいろな資源の供給源になっているということです。たとえば里山では木材もそ

うだし，いろんな木の実もそうだし，薬草などもそうです。それから３つ目は人間が人間であるための精神的な支え。人々にとって，自然の風景も，アメニティー要素として必要だと思います。さらにこれらに加えて，最近では，生物多様性を維持するための，生物の避難場所としての機能の重要性も言われていると思います。納得していただけるでしょうか。

岸：有難う御座いました。

大住：私たちは森林を扱っていて，緑が大切だというけれども，都会では緑なしでも暮らしているじゃないかというような議論があるわけです。森林をその機能で評価して議論する機能論というのは，人々を説得させやすくて，行政的にもお金がつきやすいのですが，最後まで機能論に還元してしまうと危ないと思います。個別の機能をひとつ評価しても，ほかの機能との関わりはわからない。たとえば一つずつの機能で見れば里山は，生物多様性は少しはある。しかし，持っていてもお金にはならない。でも住んでいる人はいいなと思う。そういうものの総合なので，絶対的にこれが一番という答えがあるのではなくて，その地域の文化や歴史性の中で，みんながなんとなく，この辺だったらいいなと思う。そういうところで考えていかざるを得ない。もう一つは，機能性に還元すると，お金など，非常に短期的なことを考える指標をもたされやすい。それで先程から生物多様性の問題とか，地球環境の問題が切実なことは，考えれば明らかだと思うのですが，かといって，政策的なレベルですぐに，政府が方針を変えることはないわけです。ですから，私は今すべての課題についてあいまいな言い方になるのですが，それぞれのレベルで始めていくということしかないと思うんです。そこで私が提案をしているのは，モデルを作って試行してみようということです。今，個別の課題について，こう考えればこうなるという案は出ているのですが，より大きいスケールで，里山のような持続的なシステムをどう扱っていくか，あるいは，そのバランスをどうとっていくか見ていく必要がある。それともうひとつは，何らかの対策が示されても,それを実行するまでには，結構距離がある。教科書でこうやりなさいと書いてあっても，できないことがあります。でも具体的に，あの人はこう実行しているということを実際に見てきたならば，じゃあおれもやってみようかという気持ちになれる。最終的には，モデルがなくても，これぐらいゲタをはかせてやることで，こう変わるのならやってもいいのかなとか，考えようとしている人たちに，情報を提供できるようなモデルを作っていくことが必要と思っています。

岡田：実は私は今日は林業試験場の肩書きできているんですけれど，毎月１回，森林ボランティア作業をしているんです。和歌山県北部のほうで，里山管理をしています。一回に，だいたい 60 人から 70 人が参加しています。今は草刈シーズンですから，みんなでカマを持って山に入っています。元気の森という名前をつけているんですけれども，何で元気の森かというと，われわれ人間の手で多様性が少なくなってきたかもしれない森を，元気にしよう。人が入って元気にする。そして山の中に入って気持ちのいい汗をかくことで我々も元気になろう。そんなことで元気の森という名前をつけているんですけれども，今までのお話にもあったように，里山はどこをどういう風に触ったら，どうなるかということが全然わかっていないんですね。何をしたらいいのかはわからない。ですから，すごく大掛かりなことはしないでおこう。ところどころ，さっきの縞刈りのように手を付けるところと，手をつけないところを区別する。その中でどうなっていくかを観察しながらやっていこうよ，ということをしているんですけれど，人間の力で自然をどうこうしようというのは無理で，

森の中でわれわれが，自分の都合のいいように環境を変えさせてもらって，その中で使わせてもらっているよという気持ちが持てればいいのかなあ，というような謙虚な気持ちで自然と付き合うことが大事なんじゃないかなあと，そんなふうに思いながら作業をやっているというところです。そんなところで，森とのつきあいかたというのは，それぞれにいろんな考え方もあるかもしれませんが，大きな自然と付き合うわれわれの姿勢のようなものを考えていくことが，大事なんじゃないかと考えています。

野間：ありがとうございました。まあ議論噴出という感じで，時間を超過しながらまとまらないんですけれども，とにかくいろいろな調査がされているという情報は，了解だと思うんですけれども，なかなか統一的に理解するのは，難しいというのも明らかになったと思います。まあ大住さんご提案の，どこかでモデルを作ってやってみようというのも，KONC でもいいのではないかと思います。大勢の方から貴重なご意見をいただき有難うございました。これで総合討論を閉じさせていただきます。